

武蔵野日曜聖書講筈 復活節

復活の力

――ルカ伝24章46～49節――

1992年4月19日

小池辰雄

人間も自然も 余白・余韻 天来の風 キリストの霊現 ナルドの香油 十字架・聖霊不可分
大慈大悲 霊の体 私と一緒にパラダイス キリストの証者

【ルカ24】

46 『かく録されたり、キリストは苦難くるしみを受けて、三日めに死人の中より甦よみがえり、
47 且その名によりて罪の赦ゆるしを得さずる悔改くいあらためはエルサレムより始まりて、も
ろもろの国人のべつたに宣伝えらるべしと。48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、
我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力ちからを著きせらるるまで
は都に留まれ』

●人間も自然も

この三月、四月は非常に天候が不順です。自然がおかしいのは人間界がおかしいからです。現代の特に日本の在り方、それが島原の雲仙の山がいつまでも火山の異常な状態が続いていることに現れている。あそこの人たちはお気の毒ですが、私ははつきりそう思っています。我々は自然がなくては生きていられない。自然と人間というものは一体なので、人間の在り方がおかしくなれば、自然がおかしくなる。人間も自然も神によって生かされている。自然に於けるところの神の力を信じていたのは、ドイツの大詩人ゲーテです。そういう意味において、神無き民主主義は大間違いです。日本人は新しく神を拝しなければ、西郷南洲のいう「敬天」しなければダメなんです。

●余白・余韻

私は「エン・クリスト」50号（1992年4月春季号）に「八十八路の峠の眺望」という詩を書いた。結局、本当の表現は詩的にならざるを得ない。また、もうひとつ別な表現は音楽です。絵画は或る瞬間をつかまえる。本当の瞬間をつかまえた絵画というものも素晴らしい永遠性また無限性を持つ。

日本の絵を見ると、非常に余白が、空間が多い。ヨーロッパの絵は大体ピッチリ書くところが、日本ののは非常に余白がある。また、日本の音楽は単純で余韻がある。東洋の余



裕のある、表現のかなたのものが実は表現以上のものを持っている、という消息を忘れないようにしてください。

「沈黙は金にして、雄弁は銀なり」

という言葉があるとおり、表現できないから黙ってしまう。余白のある在り方は非常に、かえって印象が深くなる。東洋の良さはそういうところにある。芸術的にいって、実は東洋の方が西洋よりも上なんです。短歌にしろ俳句にしろ、そうでしょ。短い。プロレスと違って、相撲は非常に簡単です。

●天来の風

「無」の世界は、本当はそういう世界なんです。その極致は無なんです。無の決定的な在り方をしたのが、イエス・キリストです。

「自分は何もできない。何も言えない。」

神さまが言わせている。神さまがさせている。

私はちよつとも善くない。神の他に善いものはあるか」

と、徹底的に自分を無にしている。そうすると無限無量なものが入ってきたから、無、即、無限無量とはこのことだ。私の神学でも何でもないけれども、「無の神学」はキリスト教界でバカにされているでしょう。それで結構です。ところが、我々には驚くべき力がくる。天来の風のような世界ですから。

西郷南洲は、

「天を相手にせよ」

と、その通りにして南洲は生きた。けれども、私は天なるキリストが、

「汝を相手にする」

と、上からかかってくる…(異言)…これは表現できません、キリストに捕まったら。こちらからの求めではない。

「求めよ、さらば与えられる」

というのは、

「私は与えようとしているから、求めよ」

ということですよ。

どんなに蛍光灯を明るくしたって、太陽にはかなわない。自然界の太陽に驚嘆したのは、やはりゲートルです。人間界のキリストに驚嘆したのもゲートルです。なぜゲートルが大詩人であるかという、そういうような心境を彼は自分の中に持っている。

どうぞ、皆さんは生涯そのものを、

「汝らはキリストの書なり」

とパウロが言ったが、生涯そのものを本当に「活ける書」としていただきたい。書かれた



るものは二段構えのもの。伝道は身体で私は皆さんに伝えていきます。ただ口ではない。書かれたるものは、その書かれたる文字の奥からの響きを読まないことには、本当は読んでいない。聖書もギリシア語でもヘブライ語でもない。その奥からの神の響きが聞こえているから。いわゆる聖書研究会、無教会なんてのは全然そんな世界と違う。一生懸命で「学問、学問」と言っているわ。絶学しなければ、本当の学問は出てこない。

●キリストの霊現

私は今日、標題に

「復活の力」

と書きましたが、実は「復活」という言葉は私は嫌いになった。キリストは復活ではない。キリストは「霊現」されたのだ。霊的な身体をもって実際に霊的に現象された。彼の伝道そのものが、肉体が既に霊質をもった肉体でもって彼は動いていた。それがはつきりと霊現したのがいわゆる復活なんだ。だから、私は「復活」という言葉が嫌になった。こんなことは今日初めて言う。キリストは復活ではない。霊現されたのだ。

十字架を抜きにして、いわゆる復活を考えるわけにいかない。何といても、愛の極致がこの十字架です。またこれは義の極致でもある。一般に「義、義」と言っているけれども、そんな正義のような義ではありません。神の御意を、本願を完全に行ずるものが「義人」なんです。義人は一人もいない。キリストだけです。義は、キリストは、そのような本願の結晶、本願の顕現体です。イザヤ書35章で預言しているところの事態。それが即ち本願の顕現体です。イザヤ書53章で預言しているのが十字架です。

「35／53」（53分の35）

「53」が十字架で、「35」が霊現、キリストの霊現です。キリストは霊現せざるを得ない。

「復活とはどういうことだ、こういうことだ」

と、昔はよくそんなことを言っていたが、「何を言っているか！」と言いたい。

●ナルドの香油

キリストに或る女が頭からナルドの香油を注いだ。私は、これはマグダラのマリヤだと思っています。マグダラのマリヤというのは割合にお金があったらしい。高価な石膏の壺に香油をいっぱい持っていた。

「それをぶち割って注いだ」

と書いてある。ぶち割ってということとは、

「もはやこの油もこの壺も使わな」と

ということ。全存在をもってキリストに香油を全身に注いだ。他の女性は、足に塗ったと書いてある。このマグダラのマリヤ、或る女の油注ぎにキリストは非常に喜ばれて、



「福音の伝えられる所には、この女のしたことは必ず伝えられる」とおっしゃった。有名な言葉です。

「私の十字架の死を祝福してくれた」

というわけだ。マタイ伝は26章、マルコ伝は14章、ルカ伝は22章に出ています。ヨハネ伝には出てないけれども。男の弟子どもはダメなんだ。マグダラのマリヤは七つの悪鬼を追い出された女性で、すっかり変わってしまった。そして、十字架のキリストに一番近かったのも、やはりこのマグダラのマリヤです。足にしがみついた。ロダンは非常に大胆な彫刻を作りましたけれども、その気持を表したんです。キリストが一番先に現れたのも、このマグダラのマリヤです。霊現して現れた。それで一生懸命に皆に伝えても、

「弟子どもは信じない」

と書いてある。

●十字架・聖霊不可分

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

これは凄い言葉です。

「あなたの御意を完全に行じたではないですか。

なぜ、お捨てになつたか。天地を貫く義が破れていいのですか」

と。一番捨てたくないひとを捨てたんだ、神さまは。いきなり天界に来ていいひとを十字架に架けてしまった。みんなが十字架に架けたのではない。キリストは自ら進んで十字架された。ローマの兵隊なんか、本当にやつつけようと思えば何でもなかったんだ。

驚くべき方が一番大事な仕事をした。『エン・クリスト』50号（1992年4月春季号）にも書いたでしょ（「八八路峠の眺望ながめ（来し方往く末）」）。

「……」

十字架・聖霊不可分の信交とこれに基く身証に

我らの歴史的使命あり、限りなき鍛錬と進展を希むのぞ

その根拠は何か「我は聖霊の火を投ぜんとて来れりきた

この火燃ゆれば何をか望まん、されど我は

己が十字架の血のバプテスマを受けざるを得ず

これを想いて魂たまき極ることいかばかりなるぞ！」

これがルカ12・49の聖言、十字架聖霊の奥義である

神一切で己れを無としたイエスは無即無限無量者

されば「我と父とは一つなり、

我を見し者は神を見しなり」

主の十字架で無の根源現実を賜った！

主の聖霊で無限無量の質を賜った！

これが第三の「罪びとの首」小池天弓の告白である

西郷南洲は「天を相手とせよ」と叫んでその如く生きた

「天なる我は汝を相手とする」と主は私を呼び給つ

かかる現実で書いたのが『聖書は大ドラマである』の二巻

今や八十八路の峠だ、リュックの中には聖書一巻

この旅路の果にこのサツクの中から一巻の詩が現れる！」

私は『聖書は大ドラマである』を毎晩、自分で一人で必ず読んでいます。これは天界からの示しで私は書いた文章だから。自分でまた復習している。第十巻は本当に読んでくださいよ。聖書の三日月、満月を懐く三日月ですから。私は頭で書いていませんから、はっきり言えるんです。頭で、いわゆる研究して書いたものは、いわゆる研究が進めばダメになる。そんなものではないんだ。

いいです、いわゆるキリスト教界に知れなくなつて、一向差し支えない。どうせ、福音は少数者にしか本当の意味では伝わらない。キリストの本当の弟子は、パウロ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ。この四人だ、新約聖書は。これに本当に伝わつたら、新約聖書になつてしまった。これが何億の人たちに、時代を経るに従つて読まれている。

新約聖書というのは本当に無駄がない。キリストがどんな顔をしていたか、そんな事も書いてない。超文学だね、聖書というものは。旧約には無駄もある。何と云つたつて、キリスト以前の世界だから。けれども、キリストの光で見れば

「聖書は、旧約聖書は我につきて証するものなり」

と。知らずしてキリストを預言している。

皆さんは、この福音にぶつかったという事は、そういう選びの器ですから。力が来てしようがない。また、新しい智慧がきてしようがない。何をなさつていてもそれが楽しく、そして創造的に展開していく。

今の教育者たちがその世界にいかなければ、本当の教育なんかできっこないんだ。だから、若い人たちは気の毒だよ。本当のものが伝わっていないものだから。あなた方は、生きることは伝道ですよ。一対一で本当のことを伝えてやってください。求めることすら知らないんだから。

●大慈大悲

神さまは、

「お前を捨てたのではないぞ。十字架に架けたのは罪の贖いのためだ」と。これはもうゲッセマネの祈りでキリストは既に知つていらつしやる。

本当の宗教的現実、善悪を越えた世界ですから。



「あの人がいいの、悪いの」

と、そんなことを言っているのはダメです。全部、包んでしまわなければ。全部、荷なつてしまわなければ。その力がこの聖霊の力なんです。品定めしているうちはダメです。

東洋の仏教にはそういう境地がある。しかし、福音はもつと凄^ひいその境地を持っている。そのことをキリスト教の人が知らない。聖書にそれに反するような言葉があるものだから、それにこだわる。けれども、キリストの言葉で一番凄^ひいのは

「善^まき者にも悪^ましき者にも雨^{あめ}を降らせ、直^{ただ}き者にも直^{ただ}からざる者にも陽^ひを照らす。その如^{ごと}く全^まかれ」

という言葉です。これが「全^まさ」です。神の愛というのはそういうもの。「大慈大悲」というのは、本当は神さまこそ、キリストこそ、現実に大慈大悲を持っていた。それを身で証しようとした。

ドイツでは第一人者は何といっても、ゲートルです。福音の深さを掘り下げて宗教改革したのはルターだが、ルターなければゲートルもないと言つてもいい。そのゲートルが、『ファウスト』の初めの方(797～807行)に、

「キリストは甦^{よみが}った、朽ちゆく現実の中から。

この世のいろいろなきずな、それから喜んで自分たちを引き裂け。

キリストを行為をもつて賞賛する者

愛を証する者

兄弟姉妹として人に食べ物が足りなかつたら大いに食べ物やる者

伝道して旅をする者

本当の喜びを約束する者

そついつお前たちにキリストは近くいたもつ」

「彼はお前達のそこにいらつしやるではないか」

と。さすがはゲートルです。

「存在をもつて行為をもつてキリストを証しせよ」

ということですよ。

● 霊の体

イエスは地上で完全に天国を現じていたでしょ。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは天国の前ぶれなんです。ヨハネ黙示録の前ぶれなんだ。何と云つたつて、全聖書の中心は福音書です。永遠の現在がそこに展開されているんだ、滅びない現在が。永遠というのは

「滅びない」

ということですよ。

神さまの新天地というのは、黙示録でヨハネが示された以上のもの凄^ひいものだと私は



思っている。私の詩の中にはある程度そこが出てくるつもりです。だから、そのキリストが十字架で贖罪を果たせば、これは現れざるを得ない。血は全部流れてしまった。

「血は生命のあるところ」

と創世記9章に書いてある。けれども、パウロが言っているとおり、

「血気の体あり、霊の体あり」

という、霊体をもって現れる。キリストはエマオ途上で二人の旅人に現れた。ひとりだけで来て話をした。ルカ伝24章の有名なところだ。いやあ全く大したものだよ。キリストがパンをさいたら二人は、

「あつ、イエスだ」

と気が付いたら、それでもつてキリストは、

「お前たちは私が分かかったか」

と言ってパツと消えてしまった。また、皆が戸を閉じていると、その中に入ってきた。まあ、大変なひとです。そうかと思うと、

「幽霊ではない。何か食べるものがあるか。私は食べるから」

と、お魚を食べた。この記事は大体、牧師さんも神学者も信じない、

「これは宗教物語だ」

と言って。ところが、物語ではないんだ。もう、降参するよりかしようがないでしょ。

「そんな事があるんですか？」

なんて、やっている人はいつまでたつても、その人はその次元で止まり。降参すると、何だか知らんけれども、そういうような驚くべき現実の中に入っていく。

私がない元気があるかという、空元気ではない。上から力がくるから仕方がない。

「止むを得ざるなり」

とパウロが言ったように。

●私と一緒にパラダイス

天国を現じていたキリストは、いよいよ天的な霊体をもって現れざるを得ない。「復活」ではない。復活なんていう言葉は、

「また息を吹きかえした」

なんて、冗談じゃない。そんなものではない。復活祭ではなく、キリストの霊現祭だ。

「黙示録」の「アポカルユプシス」という字は

「顕現」

という字だ。今もなお、世の末までも、天地がひっくり返る。人類なんてものは、どの辺でダメになるか知りませんけれども。要するに、聖書が言っているとおり、ダメになる。



ただ、本当にこの世界を求め、それに動いていた人。また、キリスト教の「キ」の字も知らなくても、言葉の本当の深い意味で本当に人間らしく生きた人。仏教徒でも何でもいい。神さまはそんな品定めをしないんだ。そういう人は天国へいく。聖書知識が非常に豊富な神学者であつても、そんなのは

「どっこい、お前は天国にいくわけにはいかない」

と言われるかも知れない。その人の生い立ちから全部を総合して判断できるのは神さまだけです。散々悪いことをして、最後の瞬間に、

「せめても、私を覚えてください」

と言つて平伏したら、

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

とキリストは言われた。これが福音の世界です。

「それでは、散々悪い事をして、最後に悔い改めましょう」

なんて、ダメだよ、そんな計画したつて。そんな計画をしたら、地獄のどん底に落とされちゃう。神さまをごまかすわけにはいかないんだ。自分をごまかしたり、人をごまかすことができて、神さまをごまかすわけにはいかん。本当に平伏していかないとね。パウロが、

「我は罪びとの首だ」^{かしら}

と言つた。内村鑑三も

「私みたいなやつが救われたんだから、皆救われる。私は罪びとの首だ」

と言つた。第三番目は小池辰雄、これが罪びとの首だ。だから、

「私は第二の罪びとの首だ。十字架は誰よりも私のためだ」

と書いたでしょ。

親鸞の信仰がその角度だった。

「極楽か地獄か知らんけれども、法然の言うことを私はその通り行かざるを得ない。

私の行くところは極楽だか地獄だか知らんけれども、これでいいんだ」

と。バルトが親鸞の信仰に驚いた。

人を愛するとは人を助けること。日本は問題だらけで困つたものだ。ただ一つ、これを解くカギはこの福音を受けとることだけです。

●キリストの証者

キリストは驚くべき霊体で現れて、ここに書いてあるとおりの事をした。今、霊界に行つている。私の兄貴も死ぬ二、三日前に、白き衣のキリストが現れて、

「キリストがお迎えにきましたので、お先に失礼します」

と、お母さんにそう言った。私はこの兄貴の死をとて無駄にはできない。

皆さん一人ひとり、のつぴきならぬ路を歩かされている。比較研究ではないですよ。



一人ひとりのがのっぴきならない路を歩まされている。キリストの証者となることが、地上におけるところの人生の目的です。そのためには、この十字架・聖霊をしつかり受けとって、それを身をもって、存在と行為をもって証していかなくては。証しせざるを得ない。

正に、「信行」とは信じ行うことなんだ。ただ仰いでいる（信仰）のではない。「信交」はキリストと一つになっている世界、キリストと一つとなる。そうすると、今度は、最後はこの「信行」になる。信じ行ずることになる。キリストの霊現のこの生命を聖霊をもって、我々は証していかななくてはいいかん。

ルカ伝の終りの方に、

46 『かく録しるされたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、

47 且かつその名によりて罪の赦ゆるしを得さする悔改くいあらためはエルサレムより始まりて、

悔改という言葉も、身を転ずる転身です。

48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、

我は父の約し給えるものを

聖霊のことです。

汝らに贈る、汝ら上より能力ちからを著せらるるまでは都とどに留まれ』

都に留まって祈っている。そしたら、ペンテコステです。なにしろ、クリスマス、十字架、

霊現（復活）、ペンテコステ（聖霊降臨）、これは極めて大事なんだ。

皆さん、人の亡くなった日を、地上から去った日を、命日を覚えなさいよ。命日を覚えて、

その人のために祈ってあげる。好きなものをお供えしてあげる。我々は、キリストの顕現

はもう、毎日だ。命日なんかありはしない。

キリストは、

「父よ！」

と叫んだ。私は、

「主さまー！」

と叫ぶ。この「主さま」の一言が私の祈りです。あとは何も要らない。キリストの中に入ってしまうから。それから、具体的なお願いをする。具体的なお願いの前に、本当にキリストの中に入らないで祈ったってダメだよ。それはいわゆる御利益信仰になる。

「あなたの御栄光のために、どうぞ、このことをさせてください」

と祈る。すること為すことがみなキリストの顕現という角度なんだ。決して、みな同じではないですよ。一人ひとりみな違って結構です。いわゆる全体主義ではない。福音の世界を「原理」だとか言っているバカがいるから、とんでもない。

それで、私たちはいわゆる復活を乗り越えてしまつて、凄い世界に入ったから、おしまい。

